
それは神の授け物か

R A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それは神の授け物か

【Nコード】

N2377T

【作者名】

RAN

【あらすじ】

ひっそりと山奥で暮らしていた少女。

ある日突然、盗賊に村を襲われ、塔に監禁される。

彼女は、暗闇になると自身の髪が銀色に変わるのだ。

そのためだけに珍しがられ、盗賊にさらわれた。

ただ、彼女は誰かに引き取られる日を待つしかなかった。

サイト、dノベ転載、ノベトモ2掲載作品が一部分あります。

もうここで過ごしていくらになるだろうか。

時の移り変わりがわかるのは、この部屋に唯一ある窓から見える景色のおかげ。

ただ、移り変わっていくのがわかるだけで、もうどのぐらいの日が経ったかなど数えられなくなった。

ここから見える空の色で、一日が始まるのを知り、また終わるのを知る。

たまに雨が降ったり、雷が鳴ったりするけど、毎日白い空の中、日は昇り、空を赤く染めて沈んでいく。

私は今、高い塔の、最上階の部屋に閉じ込められている。

私の髪は、暗闇の中では銀色に輝くことが珍しがられ、盗賊にこの身を攫われた。

その日までは、私は山奥で静かに暮らしていて、それがずっと続くと思っていたのに。

私のいた村では、髪が銀に染まることは珍しくなかった。

みんなの髪が銀に染まった、というよりは、みんな人とは違う能力が使えたのだ。

そうした人は、他の集落では、いわゆるはじき者だったが、そうした人が集まる私の村では、誰も人とは違うものを厭わない。

だから私は幸せに過ごしていた。

普通に好きな人もいた。

彼と恋人ではなかったけれど、いつかそうなればいいと夢見ていた。

その夢は、あの日で破れた。

静かに暮れ行く夜。また次も同じ朝を迎えられると思っていた。けれど、その時は違った。

鳴り響く警鐘。

気づいて飛び起きた次の瞬間には、盗賊達が私達の家に入ってきていた。

私達はなす術もなく、食料も金品も、あるいはその尊厳も、命も、奪われた。

私の好きだった人はどうなったのだろう。

私はそれを知る前に、私は盗賊に意識を失わされた。気づいたら、この部屋にいた。

外の様子は窓から覗ける景色でしかわからないから、他の村のみんなもここにいるのかわからない。

よほど厚い壁なのか、物音一つしないのだ。

窓のガラスもぶ厚く、しかも格子がついているので、あまり身を乗り出して見ることはできなかった。

だが、そんな部屋なのに、不思議と暑くなることはなかった。

寒すぎることもなく、いつもちょうど良い温度に保たれていた。

私は、それもまた気味が悪かった。

きちんと三度の食事は運ばれてきて、きれいな衣服も着せてもらっている。

不気味なくらい丁重に扱われていた。

今日も、私は朝の食事を運んできてくれる名も知らぬ少年に声をかけた。

いや、正確には名前を覚えてくれないのだが。

ずっと同じように過ぎる日々の中で、この少年だけがこの部屋に訪れる変化のチャンスだった。

「今日の食事は何？」

「パンと緑豆のスープと、豚肉と野菜の炒め物。炒め物をパンにはさむとおいしいよ」

少年は静かに、テーブルに座る私の目の前に食事を載せたトレイを置いた。

素材は恐らくこの近くで採れるものであろうものを使ったシンプルなものばかりだが、いつもおいしいと感じていた。

「そうなの。それじゃあそうしてみる。あ、まだ帰らないでね」

トレイを置くと、すぐに立ち去ろうとする少年の腕を私は掴んだ。少年はあきらめたようにため息を吐き、テーブルの側に立つ。

それもいつものこと。

椅子を勧めても、彼は座ろうとしないから、私はとりあえず手を離して、食事を進める。

「うん、おいしい。このスープにつけてもおいしそう」

私はパンを一欠けらちぎり、湯気がたつ緑色のスープにもつけた。すると、少年は驚いた顔をした。

「スープにパンをつけるんだ」

意外そうな少年の声に、私は眉をひそめた。

スープにパンをつけるのは当たり前のことだと思っていたからだ。

「う、うん。私の所ではそうだった。おいしいし」

「言われてみると、確かにおいしそうかも」

少年はうなずきながら、納得したように言った。

「食べてみる？」

私はスープにひたしたパンを少年に差し出す。

「ダメだって、わかってるよね？」

少年は苦笑いしながら、やんわりと断った。

私も苦笑いを浮かべ、差し出したパンを口に入れる。

さつきまでスープは豆の甘い味がしたが、今は青臭い苦味をより感じた。

「ねえ、私はいつまでここにいればいいの？」

最後の一口を入れると、私はいつも聞く質問を聞いた。

少年がどういう顔をするのかわかっているのに。

だが、今日の少年はいつもと違った表情をしていた。

いつもは、なんとなく沈んだ顔をしていたが、今はとても悲しそうな顔をしていた。

いつもは無理やり笑顔にしようとしてるのに、今は笑おうともしない。

「もうすぐ、出られるかもしれない」

「本当に?!」

少年の言葉に私は飛びつきそうになったが、その表情がそれを押さえた。

きつと、何か悪いことがあるに違いない。

「正直、僕も命が惜しいから、あまり言いたくないけど……でも、ここで優しくしてくれたのは君だけだったから、少しだけ言うよ。これを受け入れるか、あるいはどうするかは、君が決めてくれ」

少年の重い声に私はうなずき、少年の次の言葉を待った。

「君はもうすぐどこかの名のある金持ちに売られる。君は珍しいものとして、相手に売られる。下っ端だから、僕にも相手が誰だかはわからない。一週間後に、相手に引き合わせられる」

少年は一気にそう言った。

私は血の気が引き、言葉も出なかった。ただ少年を見つめるしかなかった。

少年は、気まずそうに私から視線を少しそらした。

それがまた、その話のリアルさを私に伝え、ショックは増すばかりだった。

「まだ時間はあるから……考えといて」

少年は辛そうに震えた声でそう言うと、私の前の空になったトレ

イを持ち、部屋を出て行った。
入った時と同じく、静かに戸を開け、静かに戸を閉めた。

私は部屋に残され、テーブルにしばらく座ったままだった。
もうすぐ私はまた見知らぬ人の手に渡る。

今度こそもう、故郷の地を踏むことはないかもしれない。
むしろ、私は辱めを受けるんじゃないかと、不安ばかりが募っていった。

夜、部屋に暗闇が満ちると、変化する銀色の髪を私は複雑な思いで眺めた。

生まれてからずっとあの村にいたから、この銀色の髪のせいで不便を感じたことはなかった。

だけど、今はこの銀色の髪を憎く思った。

なぜ私の髪は暗闇で銀に光るのか。

それがまだ意味のあることなら、まだ救いがあったかもしれない。
でも、なぜ銀色に変わるのか全くわからない。

私にとっては、無意味なものだった。

目の色が青や茶色、髪の色が黒や赤、というようなことと一緒にだった。

なぜ、私だけが人々に奇異な目で見られなければならないのか。

この髪が、銀ではなく茶とか、平凡な色に変わるだけなら珍しがられなかったのではないか。

あの盗賊も、私を攫わなかったのではないか、などと、思考は巡るばかりだった。

ずっと部屋にいる私には、考えることはそれしかないから、頭の

中はずっとそのことしかなかった。

おかげで、眠れない日々は続いた。むしろ、眠くならなかった。少年は変わらず食事を運んでくるが、私と目を合わそうとしなくなった。

私も、気が重くて、少年に話しかけるのも億劫になった。

自然と食事に伸びる手はゆつくりとなったが、少年は私が食べ終わるまで待っていた。

私と一緒にいる時間が長いほど、盗賊達には目をつけられるのではないかと、今更になってそんな心配もした。

だけど、やはり側にいてほしかったから、出て行った方がいいんじゃないか、とは言えなかった。

そうして、一週間はあっという間に過ぎていった。
いよいよ今日、私は売られる。

<2>

「はぁ……」

今日何度目のため息をはいたかshれない。

いよいよ、私は今日見も知らぬ人のもになるのだ。

ラエナという少女は、ある塔の最上階に閉じ込められていた。

彼女は、髪が暗闇の中では銀色に輝くことが珍しがられ、村からはぐれ者として扱われていた。

そんな暮らしを彼女は耐えられなくなり、村を出た。

そうして、山奥に人とは違う外見的特徴、または能力を持つ者が暮らす集落を見つけた。

そこには自分と同じような境遇の人が集まっていて、ラエナはすぐに迎え入れられた。

そこで暮らしていた数年間はとても穏やかに暮らしていたが、その幸せな日々は破られた。

盗賊が集落を襲ったのだ。

珍しい特徴を持つ者達だから、高く売れるのだ。

このような集落に集まる者だから、さらわれても大騒ぎされることもない。

抵抗する者は殺された。

ラエナは、ただ驚いて怯えるばかりで何もできず、さらわれた。そうして、今この塔にいるのである。

いつも食事を運んでくれる少年が教えてくれた情報によれば、今日ラエナは誰かに売られるらしい。

結局、この塔にいた期間は誰にも会えず、他の人達のこと、それどころか外のことすら知ることはできなかった。

逃げる隙を見つけることもできなかった。

だから、自分はこのまま盗賊の思うように売られてしまうのだろう、いつものように壁をただ見つめながら思っていた。

売られた先のことなど、今は考えなくなかった。

そんな時だった。

扉を控えめにたたく音が聞こえた。

いつもの食事の合図だ。少年が食事を持ってきてくれたのだ。

ラエナは扉を開けた。やはり、いつもの少年がそこにいた。

「お食事です」

「いらつしゃい」

笑顔で少年をラエナは迎え入れた。

少年は、いつもは穏やかな笑顔で来るはずなのに、今日に限っては硬い表情をしていた。

ラエナも少年の不穏な空気を感じ、笑顔をひっこめた。

少年はそれに気づいて、ぎこちなく微笑んで、食事のトレイをテーブルの上に置いた。

「……今まで、ありがとうね……」

少年に何か言いたくて、ラエナはそう口に出していた。食事をテーブルにのせた少年は、そこから動かない。

ラエナは、不審に思い、少年を見つめた。

すると、少年はラエナに視線を向けた。

ラエナは、その強い視線に、体が緊張した。

「……僕と一緒に、逃げよう」

少年は、静かに、穏やかな口調で言った。

「え……？」

ラエナは一瞬意味がわからず、思わず聞き返していた。

少年は、変わらず穏やかな表情をしている。

決意に満ちた、強い視線を残したまま。

そして、呆けた顔のラエナの手をそつと握った。

「僕の、言つとおりにして。何も言わないで」

ラエナはゆっくりとうなずいた。

「同じことは言わないから、よく、聞いてて」

ラエナは何も言えず、今度は勢いよく何回もうなずいた。

夜の闇にまぎれて、ラエナと少年は塔の裏口から抜け出た。

内部の構造を理解している少年と一緒にだと、割と難なく抜け出ることができた。

途中見張りの者がいて、緊張する場面がたびたびありはしたが。

少年はそれをうまくすり抜けることにも、慣れていくようだった。

ラエナはその様子を見て、ふとこの少年はどういう経緯での盗賊達と一緒にいるのか気になった。

そして、なぜ自分を逃がしてくれるのか、ということも。

このまま少年についていいのかという不安感が、急に胸にわいてきた。

塔の周りは森だった。

終わりがあるのかわからない、暗闇に沈む森の中をただひたすらに、ラエナは少年に手をひかれて走っていた。

走るたびにその不安が大きくどす黒く固まっていく。

胸の圧迫感に耐えきれず、ラエナは立ち止まった。

前を走る少年はそのままの勢いで、つないでいた手が離れる。

離れる時の衝撃で、少年は後ろに倒れそうになった。

慌ててラエナの方を振り返る。

ラエナは、胸を抱えて、じつと少年を見つめた。

少年は戸惑った表情を浮かべていたが、すぐにそれをひっこめた。
「どうしたの？」

しかし、今度は穏やかな表情、とまではいかなかった。

声も、少し震えている。

その震えが、空気を伝って、ラエナの肌も震わせる。

ラエナは、少年が自分を安心させようと振舞っているのは以前からわかっていた。

そして、それに甘えていた。少年がどういうものを抱えているのか、知ろうとしなかった。

ラエナは、胸に回していた手にぎゅっと一瞬力をこめ、それをおろした。

「ありがとう。ここまで来たらもう大丈夫だから。もう、あなたは戻って」

少年は、驚いたように目を見張って、ラエナを少し見つめた。

しかし少しして、またその表情を押しこめた。

「だめ。僕が気になるから、君がきちんと落ち着くまで一緒にいる」
今度は、声の震えがなかった。

それが、少年の決意の深さを現しているようで、ラエナは言葉につまった。

「だって、あなたこれ以上私といったら危険だよ！ 今戻ったら、私はこのまま逃げれるし、あなたも怪しまれずに戻れるじゃない！」

焦って、ついラエナは声を荒げた。

少年は、そこでいつもの穏やかな表情に戻った。

しかしその表情に変わった瞬間、少年の持つ空気がまた張り詰めた。

「大丈夫。それに僕は、君と出てきた時から、あそこに戻る気はなかったよ」

少年の言葉に、今度はラエナが驚いて目を見張る番だった。

「え……？」

言葉がつげず、ラエナの口だけが動く。

「人質が逃げたぞ……！」

遠くで、声が聞こえた。

しかし、言葉ははっきりと聞き取れた。
逃げたことがバレてしまった。

思わずラエナと少年は互いの顔を見合わせた。
互いに焦りの気持ちが高まっていた。

「行くよ！ 僕は大丈夫だから！ 僕と一緒に来て！ さあ！」

少年はラエナに手を差し出した。

焦りが声に表れて、少年の声は普段とは違う強い調子になっていた。

そんな状況ではないとわかっていながら、ラエナは少年の手を取ることをためらっていた。

その時、ラエナは気づいた。

人の動く気配と同時に、違う物音も聞こえた。

勢いよく近づいてくる、固いものが地面に当たる音。

音の方を振り返った瞬間。

ラエナの視界は、夜空と黒い影に覆われた。

次には、体が浮く感覚。

そして、次に少し固めの衝撃が来る。

同時に振り落とされそうな風と揺れを感じて、つかめるものに手を伸ばし、抱きついた。

また、ラエナは自分につかまってくる気配もした。

振り返ると、少年がいた。

驚く少年と目が合った。

目が合ったが、お互いに何が何だかわからず、首をかしげて、また周りを見回し始めた。

先程からの揺れはずっと続いている。

まず目に入ったのは目の前を早く過ぎる森の木々。

揺れの元を見ると、美しい毛並みと曲線を持つ黒い馬だった。

その馬を操っているのは、黒い人。

黒い人、と表現ができないほど、その人は黒に染まっていた。

黒しか見えない、と言うべきか。

闇に染まっているからではなく、服も髪の毛も黒だった。

後ろ姿であつたため、どういう人物なのか、それ以外はわからなかった。

ただ抱きついた感触からすると、骨ばった感触がしたので男性だと思われた。

その人物がこれからどうするのか、ラエナ達はわからず、ただ不安を抱えたまま、動けずにいた。

馬が止まったその場所は、今逃げてきたばかりの塔の前だった。

ラエナと少年の顔が同時に強張った。

嫌な予感が大きくなる。

「ああ、お待ちしていましたよ。……あれ、その二人は……？」

塔の中から男が出てきて、馬から静かに降りた黒い男を出迎えた。塔の中から出てきたということは、盗賊に間違いないだろう。

ということは、この男はもしかして……と、ラエナと少年の推察は一致している。

二人はまた目線を交じらわせた。

「ああ、その森で受け取った。この二人を受け取っていく。それでいいな？」

男は抑揚なく、淡々と言葉を並べていた。

「……そうですね。いいでしょう……」

盗賊の男は、少し苦々しい口調で返事をした。

返事を聞くと、黒い男はまた素早く馬に乗り、塔を走り去った。
戸惑うラエナと少年を乗せて。

それからまたどれぐらい馬の背に乗っていたのかわからない。
しばらくの間揺られて、ある場所で馬が止まった。
どの時もそうだったが、彼の動作はいつも静かだ。

ラエナと少年はどうしたらいいかわからず、馬の上で、降りる黒い男を見ていた。

黒い男は振り返る。着ているマントが翻った。

その面差しは、想像よりも幼かった。

先程から、その背中や口調から、もう少し年が上の青年かと思っていたのだ。

その黒い男は、ラエナ達と同じぐらいの年齢にみえた。

そして、男の右顔半分の皮膚は、火傷でただれていた。

二人は少し驚いて、思わず黒い男の顔をじっと見た。

「降りれるか。助けはいるか」

黒い男の声に、二人ははっとして、慌てて馬から降りた。

最初に少年が降り、慣れないラエナを助けながら。

それを見届けると、黒い男は歩を進めた。

その先にあるのは、二階建ての少し大きな屋敷だった。

暗い森の中にあるその屋敷は、とても不気味であった。

消えぬ不安を抱えたまま、二人は男の後についていった。

二人はある部屋に通された。

入った瞬間に、目の前の壁一面にある大きな窓がまず目に飛び込んでくる。

「お前達の名前を聞いていいか。俺はフレクスだ」

部屋に入った途端に、男が言う。

二人は緊張で背筋を伸ばして、男の方を向いた。

「ぼ、僕はイアセといいます」

「私は、ラエナです」

それぞれ答えた。

ラエナもここで、今まで知らなかった少年の名を知った。

その返答を聞いて、男――フレクスは二人の顔を少し見つめた。

「ここの部屋を使っている。あと必要なことがあれば、その都度言え」

そしてフレクスはそう言って、部屋から出ていこうとする。

「あの！」

背を向けようとするフレクスへ、イアセは声をかけた。

「なぜ僕達をここへ連れてきたんですか。僕達はこれからどうしたらいいんですか」

イアセの言葉に、フレクスはまた体を向けた。

少し少年を見つめる。その表情は変わらない。

その表情の変わらなさが、少し恐怖感をあおる。

「そうだな。君が一緒なのは予定外だった。奴らが見逃してくれたからよかったが」

イアセは、フレクスのその言葉に気まずそうに表情を歪めた。

「……僕が聞きたいのはそういうことではなくて……」

「ああ、すまない。わかってる。そのことについては、疲れているかと思っ、日を別にして、と話そうと思っていた。今大丈夫であれば、ここで話してもいいが、どうする？」

フレクスは、ラエナ、イアセと視線を移動させて言った。

イアセもその視線の意味に気づいた。

「そうでしたか。こちらこそお気遣いありがとうございます。それではまた明日、お願いします」

イアセの言葉に、男は背を向けて、部屋を出て行った。

「それじゃあ、疲れたでしょうから、もう休みましょうか」

と言った瞬間に、一つしかベッドがない部屋で、イアセはどうやって二人が寝るか、という問題を考えなければいけないことに気づいた。

次の日の朝。

ラエナはベッドで、イアセはソファで目覚めた。

そして、男に呼ばれて部屋を移ると、食卓が整っていた。
人の気配は男以外に全くしないのに、この屋敷はとても清潔でもあった。

得体の知れない、曖昧な不安を感じながら、席についた。

食事が終わり、少しの沈黙の後、イアセが口を開いた。

「それでは、昨日の続きを、聞かせていただけますか」

イアセがフレクスに向ける声は、ラエナがいつも聞いている声とは違って、冷えていた。

「俺の計画に協力してもらいたい」

フレクスの声は、同じ冷えたように聞こえるが、相手から温度を奪う声だった。

「僕達が、どういう理由で？」

ラエナは、何も言うことができず、二人の会話を見守る。

「あなた方は、特殊な能力を持っている。俺はそれを知っている。
その力は、俺の計画に必要なんだ」

「……あなたは、ご自分の計画がどういうものなのか、僕達がそれにどう必要なのか、説明はしないのですか」

二人が慎重に言葉を選んでいるのがわかる。

そして、特にイアセはあえて挑戦的に話しているように、ラエナには感じられた。

空気が重くて、息苦しい。

ラエナは、普通の人々に混じって生活していた時にも、このような空気を感じていたことを思い出していた。

やはり、声は出せなかった。

「この世界が、魔法派と科学派に分かれていることは知っているか」
「ええ」

イアセは、返答しつつも、全く体を動かさなかった。

じっと、フレクスだけを見据えて、口だけを動かしている。

ラエナも、フレクスの視線を感じ、小さくうなずいた。

「それならいい。とりあえず、簡単に言えば世の中の事象を、どちらの根拠を元に証明していくか、という考えの違いで分かれている。そして、魔法派と科学派の領地の境界には、大きな壁があり、見張りなどもあるために、迂闊に越えることはできない。だから、今はお互いに干渉をしていない」

イアセとラエナは、フレクスの次の言葉を待つ。

「俺達が今いるのは魔法派の領地だ。しかし、この魔法派の中にも、また派閥がある。魔法の根拠を現実の事象や事実を元に説明する理知派と、精霊らの信仰により魔法の事象を説明する信仰派だ」

フレクスはまた一呼吸おき、二人の様子を確認する。

彼は時に動作を加え、こうして説明することに慣れているようだった。

「それぞれの派閥が自分達を保つためには、皆を同じ方向に向かわせる象徴が必要だった。理知派はひたすらに先人が残した書物などの功績を、そして信仰派は、精霊の化身として、王族を」

イアセの顔が、少し強張ったようにラエナは感じた。

「科学派では、王政は絶えたと聞いた。行き来できないようにはなっているが、どこかからすり抜ける術はあるようで、情報はたまに入ってくる。しかしこちらの魔法派は、王政が続いている。象徴だけでなく、理知派、信仰派それぞれが王族をいのように利用しているからだ」

ラエナは、思わずのどを大きく動かして、息を飲んだ。

「俺は、ある城で魔法の研究をしていた。だから、その場面に出くわすことは多くあった」

フレクスはまたここで一呼吸置いて、ラエナとイアセを一瞥する。
「王族の血があるものには、他人とは違う能力があった。魔法派の研究者の連中は、その能力を解明するために、王族を実験体に行っているんだ。……今もな」

数瞬の沈黙。二人は、ある考えに行き着いていた。

「もしかして、あの盗賊達は……？」

「研究者連中に頼まれて、そういうヤツらを手配する仕事もしているんだ」

フレクスは、肯定だった。

「王族の血筋は、そんなに散らばっているものなのですか？」

「アイセが聞く。その声は、変わらず冷たかったが、どこか落ち着いていた。」

「歴史が長いからな。もうどこに何があってもおかしくないだろう」
「ラエナはまた何も言えず、口をつぐんだ。」

「それで、その話とあなたのこれからしたいこととは、どう関わってくるのでしょうか？」

「アイセが次の言葉を要求する。」

「俺は、そんな慣習はバカバカしいと思っている。多角的に検証されることは必要だが、それらが対立する必要はない。真理は一つではないからだ。その慣習を壊し、魔法がきちんと発展していける社会を作り上げ、ひいては科学派とも交流していきたい。そのための手伝いをしてほしいんだ」

話が大きくて、ラエナはただ聞いているしかなかった。

「アイセも、同じように感じたのか、少し目を見開いてフレクスを見ていた。」

「……あなたは、本当に研究者としてそのことに取り組みたいと思っ
っているのですか？」

「アイセが、探るような口調で聞いた。」

「そうだ」

「フレクスは、同じ調子で答える。ぶれたところはない。」

そして、ラエナとアイセをじっと見ていた。

長い沈黙が流れた。

「……僕は、いいですよ。協力しましょう」

「アイセは、ゆっくりと言葉を口から出した。」

「何か、決意をしたような響きがあった。」

しかし、視線は下をむいていた。
フレクスの視線が、ラエナへ向く。

「……わかりました」

ラエナは、流れのままにうなずくしかなかった。
自分には、他にどうすることもできないのだから。

その翌日、さっそく動き出すこととなった。

フレクスが研究者としていた城に潜入する。

イアセはまた何か指示を受けたようで、別行動である。

つまり、フレクスとラエナが今行動を共にしている。

フレクスは次にする行動のみを告げるだけで、ラエナはその行動にどんな意味が付随するのかわかっていない。

不安が蓄積されていって、また息苦しくなってくるのを感じていた。

城の様子を、近くの草むらに入って探っている時に、フレクスはラエナに声をかけた。

「神はこの世界に何を与えていると思う？」

今のフレクスの声は、温度を奪う声ではなく、ただ単に抑揚がないだけだった。

何を聞きたいのか推し量れないのは同じだが。

聞かれて、ラエナは思わず考えた。

神様が何を与えているか？

そんなもの私にはわからない。

ただ、神様は私達が欲しい物をくださるに違いない。

そう、信じている。

だから私はこう答えた。

「愛です」

その時、城の近くにある教会の鐘の音が響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2377t/>

それは神の授け物か

2011年7月6日03時20分発行